

第2回 第3分科会における、中村 直美講師の講演内容の整理表

項目	意見等
●自身の経験から	<ul style="list-style-type: none"> ・三重県は、南北に長く、また旧国名でいうと4つ(伊賀、伊勢、志摩、紀伊)にまたがるという、他県にはない特徴を有しており、強みといえる。 ・たとえば、自身の出身地である松阪の松阪牛は、全国区ブランドで、全国どこの地域でも話のイントロにできる。 ・三越の前身の越後屋の創設者の三井高利や、歌舞伎で縦縞を着ることを「松阪を着る」と言ったりすることなど、少しふるさと自慢のように語れる有名人もいたりする。 ・本居宣長を説明しづらかったり、宣長よりはるかに全国的有名人の松尾芭蕉のことを知らないよな、と感じたりもする。 ・伊勢うどんなども松阪出身の自分は高校まで食べたことが無く知らず、最初はカルチャーショックだった。
高校時代	<ul style="list-style-type: none"> ・高校時代、他地域から来ている子の違うところ、たとえば、尾鷲の子の、ことばが分からなかったり、雨が降ると長靴を履いてきたりする習慣や、尾鷲傘という骨組みの多い傘があることなどを知った。今は、そうしたことを体験できた伊勢高校に通学できたことを感謝している。
小学校時代	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校時代は、松阪第1小学校だが、地域のモデル校であって、校庭には県内各地の石を飾る岩石園があったり、廊下には、その当時でも既に使われていなかった脱穀機等の農機具なども展示されていた。 ・また地元の青果市場見学体験や、敷島パンの工場や豆腐屋の見学、四日市の万古焼き体験やコンビナート見学など、色々な体験見学を行っていた。 ・また、本居宣長にゆかりのある寺や山などを、自分でカメラ撮影して、夏休みの調べ学習をしていたが、今思えば現在の仕事に就くきっかけだったかもしれない原体験をしていた。
山口県萩市の明倫小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・明倫小学校の子どもたちは、1年から6年生まで、吉田松陰の残した言葉を毎朝朗唱しており、地元の人も、3年生ならここまで言える、とか分かっている。 ・学校便りなどにも、小学校の歴史にまつわるクイズとかが掲載されており、答えは〇〇日の次号で、とすぐ解答しない点が良い、親子で考えてみる仕掛けがされている。
●群馬県の「上毛かるた」	<ul style="list-style-type: none"> ・群馬県民は、昭和22年に作られたこのかるたを、小学校、中学校と育つ中で、みな暗唱できるようになる。 ・絵柄もレトロ調で、人口を実勢にあわせて変更する以外は、普遍的なものとして基本的には内容を変えない。 ・戦後の群馬において、日本の、上州群馬の文化を子どもたちに伝承、浸透させたいとして作られた。 ・名産品や偉人等の掲載内容は、県内の地域バランスを考慮したものとはなっていないが、掲載された内容の浸透度は凄い。
【提案】	<ul style="list-style-type: none"> ○三重県は、同じ県内でも違う地域に行くと、全然違う文化があり、わざわざ遠くへ行かずとも、近場で異文化体験ができる。 ○やはり、中学・高校時代以上に、小学校の時期にいろいろなものを見たり、聞いたり、動いて体験できるということが、将来に向けての郷土教育としてもっとも効果があると思われ、同じやるなら、小学校のときに徹底的にやるべきである。 ○「三重の文化」も、冊子丸ごとで使用するだけではなく、たとえば県の広報に一部を抜粋して、広く、わかりやすく見てもらえるような広報や、中学生対象なら小学生向けにリライトしてみるなどの工夫をすれば、よりうまく活用が図れるのではないか。 ○三重県でかるたを作るとすれば、一度に完成形をめざさなくとも、実際に子どもたちに試させて、ブラッシュアップしていく中で、長く三重県に浸透していくものが出来上がればよいのではないか。 ○方言は、駅前風景や国道沿いの店舗等が全国的に同じになったとしても、その「土地らしさ」を感じることでできるものであり、その地方でしか通じない言葉の意味が分かって、ずっと覚えているというのは素敵なことであり、文化教育の中に取り入れられれば良いのではないか。